

SWORD ART ONLINE fff 王の軌跡

天城時雨

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

遠からん者は音に聞け、近くば寄って目にも見よ！

これはどこにでもある転生の内の一つに選ばれた少年の物語。仮初でありながら、本物の世界で彼は王の剣を振るう。

さあ、集え王よ!!!

※アホがまた新しい作品に手を出したそうです。

# 目次

I n t r o d u c t i o n

王は買い出しに行く

1

王はラツキースケベに見舞われる

6

# Introduction

## 王は買い出しに行く

——転生——

生あるものが死後に生まれ変わること。

元々はヒンドゥー教（バラモン教）の思想であるこの概念は現代では輪廻転生等と区別されることは無く、「生まれ変わり」として使われる言葉である。〈Wikipedia参照〉

近年多くのライトノベル等で扱われるようになったこの転生。主にトラックに衝突することで起こっていたこれは、神の手違いにより死んだ人間がそのお詫びとして異世界に転生した、気付けばゲームの世界にいた、といったふうに日々バリエーションを増やしている。しかも最近は創作物、いわゆる二次元に転生する物もあるらしい。

さて、いきなりこのような話をぶち込んだことから皆だいたい予想しているだろうが、俺も転生したわけだ。

どこにでもいる高校生がトラックに引かれた。しかしそれは神様の手違いで、そのお詫びに転生させてもらえる。まさに使い古された転生物の王道だ。特に特典等はもらっていないがまあそれはいい。ともあれ俺は転生した。これはそんな俺の物語。

☆☆☆

「兄さん！洗濯終わったよ〜」

「サンキューー亮平。じゃあ庭に干してくれ。京介、亮平手伝ってやれ」

「了解」

「あいよ〜」

「お兄ちゃん！お腹すいた〜！」

「すいた〜！」

「若菜、七海もうすぐパンケーキ焼き上がるから席に座ってなさい」  
「はーい！」

「…兄さん大丈夫か？…手伝おうか？」

「そうだな。じゃあ誠也は皆の皿を用意してくれ」

「……………わかった」

「兄ちゃんただいま！」

「ただいま!!」

「ああおかえり和馬、大輔、直人。もうすぐおやつ時間だ。手を洗って着替えて来なさい」

「はーい!!!」

「今日はパンケーキ？おいしそう」

「絵里、つまみ食いは許さんぞ。真理と一緒に亮平達の手伝いしてこい」

「ブーブー！」

「うえ!?アタシもかよ…」

「手洗ってきたよ！」

「着替えきたよ！」

「おやつまだー？」

「じゃあこのパンケーキ皿に移してテーブルに運んでおいてくれ。俺は先生呼んでくる。つまみ食いすんなよ」

「はーい!!!」

「今日も賑やかで大変よろしい！」

「俺は今孤児院で元気にやっています！」

☆☆☆

「先生。おやつの時間だ。皆待ってるぜ」

「むう。菊斗よ、父さんでいいと言っておろうに…………」

「やだよ。恥ずかしい」

「ふむ。私がお前さんを拾ったばかりの頃は父さん父さんっていつて後ろを着いてきてくれたというのに。時の流れは残酷だな」

「やめろやめろ、いつの話してやがる。んなことよりおやつ時間だつて。後はアンタ待ちなんだよ」

「わかった。すぐに行こう」

さて、今の会話からわかるように俺は捨て子だ。この孤児院の前に捨てられていたらしい。らしい、というのもさすがに転生してすぐに意識がはつきりする分けもなく、物心つくまでは自分が転生したということすら覚えていなかった。ちなみに菊斗は俺の名前だ。ここにいる子供は皆苗字は先生の野見山を名乗っている。

「にしてもあんなに頼りなさそうなお前さんが今ではここで皆を引っ張るリーダーとはな。世の中何が起こるかわからん物だ」

「ま、兄さんや姉さんは皆独り立ちしていったからな。一応年長の俺がしっかりとしなきゃいけないし」

廊下を歩きながらの先生の雑談に應じる。そう、今この孤児院では先生を除いて俺が最年長だ。たまに独り立ちした兄さん達が来ることもあるが実質俺が皆のリーダー格である。とはいえいまだに高校生だが。ちなみに二度目の高校生活はまあまあ充実している……はずだ。

「まあなんだ。氣い張りすぎるなよ」

「わかってるよ。ほら急げ、皆待ってるぞ」

☆☆☆

皆パンケーキを食べ終わり、あと片付けもすんだので夕飯の買い出しに行くことにする。

「んじや買い出し行ってくる。なんか欲しいもんあるか？」

「アイス食べたーい」

「俺も俺も」

「おいおいパンケーキ食ったばかりだろうが。夕飯入らなくなるぞ」

「お兄さんのご飯ならいくらでも食べれるよ」  
「ったく。欲しい奴手えあげろ」

☆☆☆

結局全員分買ってくるようになってしまった。もう少し、こう、施設で生活している自覚を持ってほしい。とはいえ国からの支援金のおかげであまり経済的に苦労しているわけではない。むしろ裕福と言えるだろう。そのためうちでは学校のテストでいい成績を残したらお小遣とは別にご褒美に欲しいものを一つ買ってもらえるというルールがある。皆そのご褒美のためにと頑張っている。小学生の欲しいもんなんざ限りがあるしな。

俺も欲しいものはある。特にゲーム機は欠かせない。生まれ変わる前——前世からこれだけはやめられなかったのだ。が、そこは年長者。しっかりバイトして貯めた金で買うようにしている。小遣いは中学入って卒業した。

そんなことを考えながらチャリをこいでいたらスーパーに着いた。駐輪場に我が愛車をとめ、スーパーに入る。今夜はカレーだ。カレーはいい。大人数で囲めるし、材料も安い。そのうえ多少は日持ちもする。皆のご褒美を買うことができるように、我が家の夕食ではカレーと鍋が双璧をなしている。

とにもかくにも、まずは食材を買おう。アイスはその後だ。かごに入れてると溶けるしね。人参人参つと。

☆☆☆

スーパーに来るのなんていつぶりだろうか。基本的に学校以外で外に出ることはないし、家事や買い物には妹が行ってくれていた。そんな妹が剣道の合宿で今朝からいないのだ。さらに両親も泊まりで

出張だ。どちらも2泊3日なので明後日まで帰ってこない。それまでは必然的に家事から買い物まですべて自分でやらなくてはいけない。まあ当たり前と言われるとそれまでなのだが。

今日はカレーでいいか。明日もそれで凌ごう。早く帰ってゲームしたいなあ。えつと人參人參。



王はラツキースケベに見舞われる

「えっと、し、失礼します?」

「なんで疑問形なんだよ。いいからさっさと上がりな」

そうやってびしょ濡れの年下の美少女を自分の部屋に押し込む。

ヤベエな。どう解釈しても犯罪くせえ。どうしてこうなったんだっけ?

☆☆☆

「あつ、すいませ……え?」

そんな言葉が口からでたのと隣から同じ言葉が聞こえたのは全く同じタイミングだった。人参に手を伸ばす俺の隣には同じように人参に手を伸ばす美少女の姿があった。

黒くツヤのある後ろ髪は腰の当たりまで伸びており、前髪は目にかかり気味だ。その前髪から覗く黒目は驚きによって見開かれている。俺より遥かに小柄な彼女は小振りな唇を半開きにして固まっている。と、そこまで考えた所で俺の体は動き出した。

「よう・和菜。珍しいな、お前が学校以外で外出してるなんて」

そう声をかけたことで彼女も現実にも復帰したようだ。

「あつ、うん。こんにちは。リアルで会うのは久しぶり……だよね?」

——桐ヶ谷和菜

俺の2つ下の少女——俺が今高1だから中2だな——でゲーム仲間だ。先ほどの言葉からもわかるようにコイツが家から出るのは珍しい。マジで学校以外では外出してないんじゃないかなろうかってレベル。肌も真っ白だし。

「ああそうだな。んで、どした? さっきも言ったがお前さんがスパーまで来てるなんて珍しい」

「えっと、今日からスグが剣道の合宿で……。母さん達も仕事で泊まりがけの出張らしくて……。家に私しかないから。その、ご飯の材料の買い出しに。」

「ああ、なるほどね」

「どうやら自発的に出て来たわけではなかったらしい。まあこの出無精が自分から外に出るとは思ってたなかったけど。」

「ええっと、菊斗も買い出し?」

「ああ。今夜はカレーにしようと思ってな。ありやいい。うまいし簡単だし短い日持ちもする」

「へえ。私もカレーにしようと思ってたんだ。どうせなら一緒に回る?」

「そうだな。普段買い物してなさそうな誰かさんが傷んだ野菜買わないように見張ってねえと」

「うっ……。お、お願いします」

「とはいえ単なる夕飯の買い出しだ。得に何かあるわけでも無く買い物は終わった。アイスのせいで荷物が結構かさばるし重たくなつたが……。後は帰るだけ。なんて甘い考えを許してくれるほどこの世界は優しく無いようで……」

「……。なあ和菜さんや」

「……。なんだい菊斗さん」

「俺の目には大雨が降っているように見えるんだが、気のせいだよな。この体をうつつ無数の水玉もきつと気のせいだ」

「奇遇だね。私も大雨が降っているように見えるよ。それにかなりの水を体に浴びてるような気がするんだ」

「そう、現在俺達は大雨の真っ只中にいる。」

「スーパーを出たまではよかった。チャリを押しながら和菜と世間話をしていたところ、急な夕立に見舞われたのだ。ともあれどうすべきかは明白で……」

「俺ん家まで走れっ!お前ん家よりは近いだろ!」

「う、うん!」

「そうして冒頭まで至るわけだ。」

ん？どうして俺の部屋にあげてたかって？んなもんちびっこ共がうるさいからに決まつとろう。奴らアイスを奪つていったかと思えばあれこれ余計なこと聞きやがつて。「お持ち帰り!」じゃねえよ！どこで覚えて来たんだそんな言葉。だいたい俺じゃ和菜に釣り合わねえつての。

☆☆☆

「ほれ、とりあえず荷物置きな。風呂たまるまでまだかかるだろ」

「うん、ありがと」

女子と自室で二人つきり。しかも相手はかなりの美少女だ。とはいえ俺はあまり緊張していない。コイツとゲームするために俺の部屋に上げることは結構多いし、そもそもコイツとは友達だ。何かあるわけでもないのだからいちいち緊張する必要もない。

「ね、ねえ菊斗」

「ん？」

「えっと、お風呂入れるまであとどれくらい？」

「ああ、まあ大体5分くらいだろ」

「そ、そっか……」

コイツは毎回緊張してるみたいだが。まあ友達とはいえ異性の家だ。緊張するのも無理はねえかもな。

世間話をしながら待つこと約5分。『ピーー』と電子音が鳴り響いた。どうやら我が家の給湯器は無事その仕事を終えたらしい。

「ほれ、風呂張り終わったぞ。先に入ってこい。風呂場は一回に下りて直ぐ左だ」

「うん。えっと、覗かないでね？」

「覗かねえよ！っつか覗けるほど家の風呂場でかくねえし！さっさと入ってこい！」

「はい」

ま、まあ緊張が解れたみたいでよかった。和菜は俺の部屋を出て風呂場に向かって行った。

ああ、ラツキースケベなんてないからな。振りじゃないぞ、ほんただぞ！

なんてくだらないこと考えてたら扉がノックされた。

「ん、誰だ？」

「アタシだけど」

「ああ、真理か。どうぞ」

そう言って入ってきたのはこの孤児院で唯一の双子の片割れ、真理だった。彼女はまあ、かなり男勝りな所がある。そんな彼女が何の用だろうか。

「どした？何か急ぎの用でも——」

「ふっふっふ、これを見たまえ！」

「なっ！それは!?!」

「そう、これは菊兄が大事に保管していたSAOβテストの応募ハガキ！」

そう、やつの手にあるのは俺が大事に保管していたSAOβテストの応募ハガキ。SAOとは大手電気メーカー『アーガス』が作り上げた完全フルダイブ型のVRMMORPGだ。これは1ゲーマーとして是非βテストに応募しなくては。そう思って応募ハガキを書いたのだが……。

「何故それをお前が……。いや、それよりもそのハガキをどうするつもりだ！」

「そんなの決まってるんだろ。アタシの名前で応募してやるんだ」

「んなっ！なんでそんなことを!?!」

「今日の仕打ちを忘れたとは言わせねえぞ。意味なく雑用させやがって」

雑用？っと思っただけで直ぐに答えに行き着く。今日、パンケーキを焼いていたときに絵里と一緒に洗濯物を干す手伝いに行かせたんだった。

「いやいやそんな理由で——」

「うるせえ！嫌なら取り返して見せろ！」

そう言つて真理は部屋から飛び出して行つた。

「いやいやいや、待ちやがれゴリアー！」

俺も直ぐに部屋を飛び出す。奴は一階に逃げたようだ。何としても取り返さねえと。

「うひゃー！」

ガキかあいつは！叫び声を上げて階段を下りていき、そのまま左にカーブ。俺も急いでそのあとを追う。奴はどうやら脱衣所に飛び込んだらしい。

この時の俺は少なからず冷静ではなかつた。目の前の出来事に気を取られすぎて脱衣所に誰か居ることをすっかり忘れていたのだ。加えてタイミングも悪かつた。

まあ何が言いたいかと言うと――

「へ？」

脱衣所で用意してあつた着替えを身につける直前、つまるところ全裸の和菜とぼつちり目があつた。必然的にその全身も目に入る。

「き、キヤアアアアアア!!！」

誰だよラツキースケベなんてないとか言つた奴。バリバリあんじゃないかねえか。和菜の悲鳴を聞きながら頭の片隅でそんなことを考えていた。